

編集 後記

『年報』38号をお届けする。ご覧のように本号から、『年報』の判型が大型化し、装いを新たにしましたが、それについては後に述べることにして、ここではまず本号の編集経緯を簡単に記しておく。

例年どおり昨年5月に投稿希望を募り、論文12編、研究ノート1編の執筆申し込みをいただいた。またほぼ同時期に本号で小特集を組むべく、グループ研究の方々にご検討をお願いしたが、お返事はいずれも、研究成果をまとめるにはなお時間を要することであった。そこで今年度は、所員の投稿原稿を中心に『年報』を編集することとなり、本格的な編集作業に入った。原稿締め切りは、例年通り10月20日とし、執筆者には申し込み枚数以内で原稿を仕上げるよう依頼した。原稿締め切りの前後に、4名の方々から執筆辞退の申し出があり、また期日まで提出された原稿も予想外に少なかったために、編集担当は大慌てをしたが、幸いにも執筆者の「ご協力」をえて、最終のデットラインに間に合わせることができた。また投稿原稿とは別に、編集担当の判断で、書評2編を外部の執筆者に依頼したが、こちらは依頼がやや遅れて、比較的短期間で原稿を仕上げていただかねばならず、執筆者にご迷惑をおかけした。校正作業はおおむね順調にすすんだが、今回もまた常識の範囲を超えた「直し」や「加筆」がおこなわれたのは残念であった。同じ研究者として、ヨリ完全なものをという気持ちは分からねでもないが、印

刷オペレーターが「あきれる」程の「直し」は、やはり考え物であろう。今後注意していただきたい。

『年報』判型の大型化については、すでに社研ニュース等でお知らせしたが、大型のB5判を採用したのは、①近年大冊化していた『年報』をスリム化するとともに、②図表や統計を挿入する場合に、B5判の方がヨリ自由度が高いと判断したからである。多くの大学や研究所の紀要・所報も近年B5判が目立つようになっており、この際『年報』も思い切って大判化することにしたのである。

すでにご承知のように、本年3月末日をもって所長・事務局長が交代される。これまで2期4年所長をつとめられた古川 純氏、同じく事務局長をつとめられた黒田彰三氏にかわって、新所長に柴田弘捷氏、新事務局長に村上俊介氏がそれぞれ就任される。この4年間、古川・黒田コンビの下で、社研50周年が盛大に祝われ、また社研叢書の刊行もはじまり、さらには中国との学术交流も活発に展開された。古川さん、黒田さん、どうもご苦労さま。新所長の柴田さん、新事務局長の村上さん、これから大変ですが、どうかよろしく。

最後になったが、今回もまた編集作業をすすめるなかで、社研職員の竹内佐和子さん、公人社の大出明知氏には大変お世話になった。とくにこの3月末にご定年を迎えられる竹内さんは、編集業務全般にわたって、編集担当をアシストしてくださった。心からお礼を申し上げる。これまで30年近くも社研を切り盛りされてこられた竹内さん、どうもお疲れさま。今後もしばらくは囑託として大学に残られるようですが、竹内さんにとっての節目（ご定年）が社研の節目にならないよう、所員は相当の覚悟をせねばなりません。

（酒井 進）